

# 長野県次期総合5か年計画の策定に係る第2回上伊那地域懇談会 概要

## 1 日 時

令和4年8月31日（水）14:00~16:00

## 2 場 所

伊那合同庁舎 302号会議室

## 3 説 明

次期総合5か年計画の策定について（説明者：上伊那地域振興局企画振興課）

## 4 意見交換

（上伊那農業協同組合 西村 篤 代表理事組合長）

- ・いつまでに、誰が、何をするのかを明確にした計画に。
- ・ほ場の大区画化はできるところは既にほぼできていると考えており、また、全部ではないが、大区画化した水田の使い勝手が悪いという声もある。中山間地域でのほ場整備が必要ではないか。
- ・水路の整備は重要。毎年住民が整備しているが、水漏れ等の問題が生じている。ここはしっかり整備を進めてほしい。
- ・いきなり脱炭素を目標に据えて何かをしようとしてもうまくいかない。例えば農業では、化学肥料を減らすという目標があるが、そのためには土壌診断や代替手段の確保など、そういう取組をきちんと整理して進めていって、初めてCO2を減らすというところにつながる。

（上伊那森林組合 唐木 信彦 総務課長補佐）

- ・上伊那森林組合ではスマート林業としてドローンやGISの活用を段階的に進めている。若い人に非常に興味を持ってもらえる部分であるため、積極的にPRを。
- ・土砂災害対策について、適正な森林整備もその一部を担っている。
- ・ペレット生産量は増加しており、今年度は4,000t以上を目指している。更なる利用拡大のためには、一部の人が利用するだけでなく、地域が一体となって進めていけるような仕組みづくりが必要と考える。

（駒ヶ根商工会議所 福澤 秀宏 会頭）

- ・人口減少に対し、具体的どうするかの話し合いが進んでいないと感じる。
- ・上伊那の中でもリニアや三遠南信自動車道には北部と南部で温度差がある。地域間での競争ではなく、上伊那地域が一体となって取組を進めていくことが重要。急がないと間に合わない。
- ・商業について、後継者がなく廃業せざるを得ない話も出てきており、コロナ終息後も元に戻らないような状況が予想される。対策を検討してもらいたい。

(世界一を目指し行動する上伊那地域企業の会 鈴木 隆 会長)

- ・めざす姿や取組の方向性に、とがった部分がなく、当たり障りのないものとなっていると感じる。どの地域も同じような内容になっているのではないか。「この取組を進めれば何かが変わるのではないか」と思える計画に。
- ・すべては「ひと」だと思う。めざす姿の「ひとつづくり」の部分はもっと深掘りが必要。
- ・農林業でも商工業でも、人間の活動の背景には技術がある。これを学ぶ場が非常に重要で、デジタル技術も活用しながら、あらゆる年齢層の人が、学びたいときに学べる場があるとよい。
- ・雇用の確保のために大手企業の工場を誘致するという従来の考え方から、少人数でも地域に根差す企業に来てもらうために研究開発機能や本社機能を誘致するという一方で、方向性はよいと思う。ここにもう一歩踏み込んで、プロデューサーやオーガナイザーといった、周りの企業を巻き込んで新しい価値を生み出す人材の誘致を進めてほしい。
- ・脱炭素は狭い視野ではなく、世界規模で考えることが大事。世界にはこれから成長していく国や地域もたくさんあるが、脱炭素はその頭を抑えかねない。脱炭素が世界の成長と両立できるのか、見据えながら進めていかなければいけない。
- ・過去問題になったフロンガスやアスベストは原因が明確であったため、撤廃に向けた取組や、そのための技術開発も進めることができた。一方で、脱炭素は関係する分野が非常に幅広く、ひとつの取組をただけでは実現できない。施策の連鎖がうまくいって初めて脱炭素につながる。

(一社)長野県建設業協会伊那支部 桃沢 傳 支部長)

- ・高校再編はもっと皆で議論すべきであるが、一般人には何も情報が伝わってこない。このまま高校再編が進み、地域に実業高校がなくなってしまうことを非常に危惧している。
- ・子どもたちは地域の宝であり、教育は投資。めざす姿に記載がないのは寂しい。
- ・地域外との交流について、上伊那として大きな方針を掲げて、それに向かって人を誘致していくことが重要。高齢者ばかり来ても困ってしまう。
- ・農業は大型化、林業は林道整備が必要。
- ・2000年から22年間大きな災害が続いており、この間、建設業は消防や救急、自衛隊と同様に実働部隊として頑張ってきた。ただものをつくるだけではない、現在の建設業のあり方が、この計画では理解がされていないと感じる。

(伊那職業安定協会 川上 健夫 会長)

- ・求人冊子の作成など、職業安定協会や市町村、商工会議所など、様々な同じようなことをやっており、無駄な部分があると感じる。それぞれが個別に取組むのではなく、「上伊那」の視点で呼び込むことが必要。
- ・現在、上伊那広域連合と連携し、求人のマッチングアプリを作ろうとしている。県でも、それぞれの地域で取り組んでいることを集約して一つの力にするコーディネートに力を入れてほしい。
- ・この地域は製造業が多く、在宅勤務の導入は難しい。ただ、都会の企業で働く人が、上伊那でリモートワークをしているという話は多く聞く。そういう人たちを呼び込む環境づくりや、情報発信を進めていくことが重要。

- ・観光は点ではなく、面や線で、上伊那というパッケージで発信していくことが必要。
- ・情報発信や定住促進、子どもたちへの教育、地域の魅力づくりなど、複数の取組を包括したプロジェクトも取り入れてほしい。

(郷土愛プロジェクト 安積 順子 キャリア教育コーディネーター)

- ・資料の訂正を2点。上伊那では小中学校だけでなく、高校でも先駆的な取組が進められている。また、郷土愛プロジェクトが担っているのは地域と学校をつなぐ役割であり、総合的な学習の時間で教えているわけではない。
- ・キーになるのはやはり「人」であり、特に子どもたち。キャリア教育を含む学校教育の重要性や、地域とともに取り組む教育の必要性を強く感じている。めざす姿には学校や教育に関することも入れるべき。
- ・新しい計画でのめざす姿を、小中高校での探求のテーマとし、地域の子どもたちが一緒に地域のあり方を考えていくということもできるのではと考えている。それが、子どもたちが大人になったときに、自分たちが次の世代に何を伝えていくべきか考えることにもつながる。
- ・信州型コミュニティスクールコーディネーターの育成について触れられているが、県では地域コンソーシアムということで、地域のキーパーソンと一緒に教育に参加するコンソーシアムを作ろうとしている動きがある。まず、教育と一緒に進めていく地域づくりに重点を置くのがよいのではないか。

((一社)〇と編集社 赤羽 孝太 代表理事)

- ・人が重要であることはほかの人とも同じ認識であるが、大切なのは数ではない。100人の受動的な人より、1人の能動的な人来てもらった方がよい。どういう人来てもらいたいのか、人がどういう地域を作っていくのかを考える必要がある。
- ・未来投資を全面に出してほしい。未来がない地域に若者は来ないし、若者が来ないところには未来はない。若い人やチャレンジしたい人に対し、人とお金をつけます、応援しますという宣言を盛り込んでほしい。
- ・大きな求心力ではなく、小さな求心力を訴求できる人をたくさん育てていくことが大事。それにより、多様な人を受け入れられる環境になる。クリエイティブやイノベーションを地域に起こしたいのであれば、変わった人を受け入れられる環境が必ず必要になる。

((一社)上伊那医師会 城取 誠 事務局長)

- ・医療人材確保について、医師だけではなく、看護人材の確保も加えてほしい。
- ・上伊那医師会が運営している准看護学院では子育てを終えた女性が資格取得をめざし学んでいる。ひとづくりという点では、このようなセカンドキャリアの形成も重要な要素と考える。
- ・人口減少、少子高齢化は避けられないということをしっかりと計画に位置付け、その上でどのような地域にしていくかを考えていくことが必要。

((福)伊那市社会福祉協議会 森田 英和 事務局長)

- ・語句について、一般の人にはわかりにくい部分や、狭い捉え方をされてしまうと思われる

部分がある。例えば「地域の伝統文化をテーマとした…」だと、「地域の伝統文化しかテーマにしないのか」と読めてしまう。表記については検討をお願いしたい。

(上伊那市町村教育委員会連絡協議会 北原 秀樹 会長)

- ・学校での ICT の導入が進んでいるが、ICT に頼りきりになってしまわないよう、本当に子どもたちが求めているものや、学ぼうとしていることを忘れてはいけないと考えている。
- ・地域部活動については、指導者の確保や育成のハードルはかなり高いと感じている。
- ・伊那市では中学生を対象にしたキャリアフェスを実施しているが、子どもたちが、ただ職業を知るだけではなく、そこで働く大人たちと出会い、その思いを聞くことで、自分の生き方や地域の魅力を見つめなおす機会となっている。実践や体験を通した学びが大切。

(伊那市新産業技術推進協議会 栗林 秀吉 会長)

- ・県の計画は具体性がない。明確な達成目標を置いて、アクションを起こし、検証することが必要と3月の地域懇談会では強くお願いした。本日の資料では指標に基づく進捗管理について記載されているが、しっかり進めていただきたい。
- ・キーになるのは産業で、これを立て直さないといけない。例えば林業であるが、記載されているスマート林業導入による省力化・効率化や経営の安定化に向けた助言、これで林業が振興できるのか。
- ・行政がもっと経営人材を活用し、しっかり成果を出していく体制が必要。
- ・企業のデジタル化は難しいところもあるが、地道に進めていくことが大事。
- ・若者だけでなく、高齢者の活躍をもっと進めるべきであり、そういった視点も必要ではないか。

(リサイクルシステム研究会 吉川 琢郎 会長)

- ・めざす姿は、多少夢物語でもいいのでわくわくするようなものにしてほしい。それが求心力、軸となって産学官が動いていく。
- ・人口減少は不可避であり、それに合わせた未来をデザインしていくことが大事。そこでキーワードになるのが新しい働き方、暮らし方。サテライトオフィス、サテライト本社のようなものがこの地域にもどんどん生まれてくるとよい。
- ・環境問題というとこれまではボランティア（自発的、任意）にできる範囲で取組めばよかったが、脱炭素という世界の約束事ができ、すべての産業がこれに向かって取組をしなければならなくなった。
- ・個人や企業がエネルギーの自給自足に取組み、不足分を地域から補うといった、地域全体としてエネルギーをどうしていくかのデザインを描いてほしい。エネルギー価格の高騰が進む中、エネルギーの地産地消・自活が企業に利益や付加価値をもたらすことは間違いない。
- ・脱炭素というとちょっと遠い世界の話になってしまう。「エネルギーの地産地消を進める地域づくり」を軸としてはどうか。
- ・ブランディングは上伊那ではなく、伊那谷というエリアで、南信州地域と連携しながら進めていくことが大事。